



# Acid Bufferzone

アシッドバッファゾーン

伊藤暢達

Masahiro Ito

大日本絵画  
DAINIPPONKAIGA





# Acid Bufferzone

アシッドバッファゾーン

伊藤暢達

Masahiro Ito

大日本絵画  
Dainippon Kaiga

Masahiro Ito



# About the author

## 伊藤暢達

Masahiro Ito

いとう まさひろ 1972年生まれ。1997年多摩美術大学グラフィックデザイン科卒。同年、コナミ株式会社入社。ゲーム『サイレントヒル』シリーズにおけるクリーチャー、背景、モーション作成、アートディレクションに参加し、そのグロテスク／エロティックなフォルムや金属の錆びのような質感を持つデザインワークで脚光を浴びる。『サイレントヒル』作中に登場したレッドピラミッドシンク、フレッシュリップ、バブルヘッドナースなどのデザインは伊藤氏によるものであり、これらは現在でもフィギュアが発売されるなど、国内外に熱狂的なファンを獲得した。2006年にイラストレーター／デザイナーとして独立し、以降はカードゲームのイラストレーションなどで活躍。2024年の『サイレントヒル2リメイク』、同ショートメッセージにもクリーチャー、背景デザイン等で参加。2014年から開始されたアシッドバッファゾーンシリーズではストーリー、イラスト、立体造形、デザインのすべてを担当し、新たな、そして濃密な世界観を誕生させている。

Born in 1972. Graduated from the Department of Graphic Design at Tama Art University in 1997, and joined Konami the same year. He gained widespread recognition for his grotesque yet erotic creature designs and rusted-metal textures in the Silent Hill series, where he worked on creature and environment design, motion, and art direction. Iconic designs such as the Red Pyramid Thing, Flesh Lips, and Bubble Head Nurse were all created by Ito—these characters remain cult favorites, with figurines still in production today. In 2006, he became a freelance illustrator and designer, expanding his work into illustrations for card games and more. He returned to the world of Silent Hill in 2024, contributing creature and environment designs for the Silent Hill 2 Remake and its accompanying Silent Hill: The Short Message. Since 2014, he has written, illustrated, sculpted, and designed the Acid Bufferzone series—building an intense and deeply immersive new world of his own creation.

# Table of contents

004	Chapter 1
	Acid Bufferzone
048	Chapter 2
	Glossary
063	Chapter 3
	Model work
064	
	Tupolev Tu-2
068	
	Yakovlev Yak-3
070	
	Dekabrist
074	
	IS-159_
078	
	IS-12-631
082	
	Sofia-M
084	Chapter 4
	Sketches & Illustration work
126	Chapter 5
	Afterword

# Chapter 1

## Acid Bufferzone



「航路は、この最も太平洋側の"No.5"を選択してください。後はクヴァトラートナヤ ガラ  
ヴァーが自動でやってくれます」

「了解した」

「作戦の成功をお祈りしております！」

地平線にやっと顔を覗かせた陽の光が、ゲートを出たドルニエを真横から照らした。

整列された9機の"Д е к а б р и с т \_ д е к а б р и с т"のそれぞれの機体上では、逆光で  
照らし出された整備員達が共振実験装置"ソフィヤ・M"の装填作業を行なっている。









こういった広い場所に出てみると、彼は改めて、こんな場所にも酸化電磁片が侵出してきたのかと実感できた。それが反射する光がどこか儚いと言う操縦員達が沢山いるが、彼にはとてもそうは思えなかった。

「隊長！」

巨大な体軀を背にしてひときわ小さく見える人影の集団から、彼を呼ぶ声が聞こえた。この感覚は実に久しぶりだった。子供の頃、戦火に巻き込まれてその右目を失った彼には、戦争はトラウマに近い存在であるはずなのに、こうして懐かしさを感じる。一瞬、そんな自分を蔑んだりした。

「隊長、復帰、おめでとうございます！ やはり隊長は戦闘服の方が似合いますね！」

「はは、ミネシマ、初の“国家大栄誉操縦員”を授与された時の公式画像ではなく、この格好で歩く姿の方が出回ったから、だる？」

ミネシマとスズキが、彼の元で戦闘に従事していた時を懐かしむように話している。そんな彼等を見て、ドルニエも自然と笑みがこぼれた。

「ミネシマ、スズキ、また、よろしく頼むな！」

「はっ、隊長！」

そう彼が何気なく声を掛けると、二人は条件反射で背筋が伸びた。ふと、彼が自身の搭乗する機体の上部に目をやると、装填に手間取っていた作業員達がようやく下へ降りようとしていた。また、こうしてそばに寄ってみると、その機体の大きさに圧倒された。と同時に、長いブランクからくる不安も和らぐ気がした。‘碧’の頃、前線に滞在した期間は決して長い方ではなかったが、466体に及ぶ飛来攻撃物体の撃墜を記録してみせた事が、今の彼の憂鬱な気分を少しでも払拭してくれればな、と願った。

しかし、その憂鬱の起因は別のところにあるような気もした。彼は、ミネシマ、スズキと同じく、かつて共に戦ったサーシャの事を思い出していた。彼女が自分の部隊に配属された当初、純粋な人間である彼にはやはり少しわだかまりがあった。子供の頃に脳裏に焼きついた“アングル”という存在に、である。前大戦期の、あの凄惨で膠着した禍難に“強引に”終止符を打てる程の存在である彼等の凄まじさは、まだ11歳の彼にもよく理解できたのだ。あの光景は一生忘れることはできないだろう、と子供ながらに直感した。

しかし、戦闘時に凄まじい能力を発揮する以外は普通の人間と何ら変わらない彼女には、アングルとしては人懐こい方でもあった性格も手伝い、次第に愛着も湧いていった。周囲の操縦員達が悪気無く口に出す“アローン”という蔑称に無意識に孤独感を背負う彼女の相談相手もしたことがあった。彼が退役する間際、以前はF第63域と呼ばれたこの地の機能停止に伴い部隊も解体され、移動を命じられた彼女は東へと移っていった。そんな彼女が、この作戦の目的地である「III第3類枢域均衡分岐点最終防衛線区」で今でも操縦員として従事しているらしいとの情報が、一昨日、彼に報告された。





隣のデカプリストでは、Бесник Тувайцの点検を終えて、整備員たちが機体を離れて行く。  
「隊長、ソフィヤ・Mの起動方法は、昨夜の説明通りです。緊急脱出の際のレバーがそれですね」  
傍らの整備員の説明を聞きながら、彼はデカプリストの狭い操縦席に身を沈めていった。  
「しかし……相変わらず操縦員の事を無視した設計のコクピットだな、これは……。設計者どもに強く言っておいてくれ、もっとマシンな設計の機体を考えろ、とな!」  
「隊長、その"もっとマシンな"機体に搭乗する為に、是非、作戦を成功させて帰還してください!」







椅子に深く座ると、懐かしい赤い直方体をしたヘルメットを装着する。ナビゲーション起動方法も体がすっかり憶えていた。操縦棺ハッチが閉まる音が聞こえると、クヴァトラートナヤ ガラヴァーのナビゲーション・ヴォイスが認証確認の声を発する。  
「DNA認証により、ドルニエ ヤー ホドロフスキーのオリジナルである事を確認完了しました。目的地の最終確認をお願いします」  
そう言い終わると、目の前の青く発光するモニターに、「1111第3類枢域均衡分岐点」の文字が羅列された。









ACID BUFFERZONE  
Episode 2

# Бесник Тувайц

A級Бесник Тувайцを抱えた9体のデカプリストは  
明朝にF第93域を発ち  
「CC第3類枢域均衡分岐点最終防衛線区」に向け進撃を続けていた



巨大な体躯にはまるで相応しくない窮屈な操縦棺内で、ドルニエはまた、サーシャと共に任務に就いていた日々を思い出していた。

「ミネシマ、スズキ、応答を乞う」

「はい。隊長！」

二人が同時に応える。

「サーシャ、憶えているだろう？」

「勿論！ ヤツの桁違いな撃墜スコアには結局勝つ事は出来ませんでしたけどね！」

「ハハッ！ あいつはバケモノだからな。アンゲルの中でもズバ抜けていた方だろう？」

「それで何度危ないところを救って貰ったものか。ちゃんと感謝しろよ、スズキ！」

「ミネシマ、お前もだろっ！」

「隊長、ヤツがどうかしたのですか？」

ミネシマが怪訝そうに訊き返す。

『第3頸枢域の防衛線で、あいつが任務に就いているらしいんだ……』

「サーシャがですか？ アイツの最終異動域は確か……」

「あいつ、アンゲルだからな。可能性としては高いだろう」

「そ……そうですね……。しかし、その情報は確かなものなのですか？ 2年前のあの混乱で、追跡も困難かと……」

「隊長、それは私も聞いた事があります」

スズキが冷静な声で二人のやりとりに入ってくる。

「恐らく、それは確かだと思います。隊長が退役されていた間に、多くのアンゲル高等操縦員が第3頸枢域に異動になったはずですよ」

「それに、サーシャは以前、"片割れ"を失っていますから」

「そういうことか……」

ふと線と線が繋がった事に、落胆にも似たつぶやきを見せるドルニエ。

「ミネシマ、スズキ。もうじき、この紅い塵海を抜ける。ほどなくして防衛砲台が設置されたエリアに接触するだろう。そこで切り離した後、お前等は帰投しろ」





# Декабрист

High speed БТ transporter  
with Бесник Тувайц





「お前等の"ダミー"は予備でこの部隊に装備された物だ。ベス  
ニークトゥヴァイツェは5体もあれば充分だからな。最終防衛  
線区まで無理に同行する事もないだろう……」

「隊長！ 今回の作戦にはそれは承知の上で参加しているの  
ですよ！」

スズキが声を上げる。

「スズキ、隊長の言うことを察してやれよ。隊長があの時、どれ  
だけサーシャを可愛がっていたか知ってるだろ？ ただでさ  
え当時はあんなにも全域で嫌われていたアングルだと言うの  
に。まるで娘の様な寵愛っぷりだったの、憶えているだろ？」



「抜けるぞ！」

ドルニエが叫ぶと、大地は序々に、その表面から赤味を失って  
いく。刹那、防衛線とは名ばかりの、旧時代に設置された拙い  
砲台群が息を吹き返したかの様に集中砲火を浴びせ始めた。

「1号機、4号機、ダミー弾射出！」







ミネシマとスズキの操るデカブリストが、抱えていた巨大なロケットを切り離す。2体のダミー弾が引き起こした爆発は全ての砲台群を丸呑みし、残りの7台がその中を無心に突き進んで行く。





ISBN978-4-499-23413-9

C0076 ¥3900E

定価(本体3,900円+税)



9784499234139



1920076039003



# Acid Bufferzone

